
迷子の子竜と村娘

ナリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷子の子竜と村娘

【Nコード】

N8994Y

【作者名】

ナリ

【あらすじ】

人間の領地に迷い込んできた子ドラゴンと、それを拾った天涯孤独な村娘の話。全8話。

ここは、エメイラという国の東の端にある小さな村。
自給自足は当たり前、周りを深い森に囲まれた、さびれた村だ。

「だめよキュウ、外に出ちゃだめ」

古く小さな家の入口で、ルーシャは中にいる『キュウ』にそう言いつけていた。

「食べ物をとってくるから、いい子で待ってて。誰か来ても扉を開けては駄目よ」

キュウの頭をひと撫でしてから扉を閉める。と、中からは「きゅうきゅう」という寂しげな鳴き声が聞こえてきた。まさに、彼の名前の由来になった鳴き方だ。

悲しい時や寂しい時、そして甘えたい時なんかには、キュウはそんな風に鳴くのだ。

ルーシャは後ろ髪を引かれる想いで家から離れた。キュウは頭がよく、ルーシャが遠ざかっていく足音が聞こえると、呼び戻すのを諦めぴたりと鳴き止んだ。

賢いんだか、ちゃっかりしてるんだか。

ルーシャはふふつと笑いながら、キュウに与える果物をとるために、村の外れの森へと向かった。

「やあ、ルーシャか」

と、その途中で、羊たちの世話をしている年配の男性に出会った。

年のせいで白くなった髪が、風に寂しく揺れている。

「こんにちは、アイノスさん」

ルーシャはこの人物が少し苦手だった。なので挨拶だけして足早にその場を去ろうとしたのだが、アイノスはそんな彼女に遠慮なく話しかけてくる。

「どうだ、うちの息子との結婚の事、少しは考えてくれたかね？」

「いえ、あの……私まだ、結婚は……」

ルーシャは困ったようにうつむいた。が、アイノスは追撃の手を緩めない。

「だが、君も今年で18だろう？　あまりゆっくりしていると嫁いき遅れるぞ。両親のいない君を嫁にもらってやろうという家が、うち以外にあると思うかね」

余計なお世話です！　と叫べたなら、どんなにスッキリするだろう。ルーシャはそんな事を考えながら、ただ曖昧にほほ笑むだけだった。

「そうですね、考えておきます……」

大体、アイノスの息子というのは、もう50近いおじさんなのだ。アイノスは自分たちの世話——という名の介護——をさせるために嫁をとろうとしているのだろう。

「では」

アイノスがまた話し始める前に、ルーシャは会釈をしてそそくさとその場を離れた。

早足で森の前まで来てから、ふうとため息をつく。自分も近い将来、誰かと結婚しなくてはならないことは分かっている。それが世間の常識だから。

しかしまだ好きな人もいないし、身を固める気もなかった。なにより今ルーシャは、キュウの世話で精一杯だったし。

「あ、カリムの実。キュウの好物なのよね」

しかし、キュウの世話を焼くのは楽しく、ちつとも大変だとは思わない。

ルーシャはキュウの喜ぶ顔を思い浮かべながら、後ろに背負った大きなかごにカリムの実を入れていった。

「これくらいでいいかな？」

背中がずっしりと重くなったところで、ルーシャはひと息ついた。今日は仕掛けておいた罠にウサギが掛からなかったので、収穫は果物ときのこだけ。肉が好きなキュウはちょっとがっかりするかもしれない。

ルーシャは真っ赤な西日を浴びながら、キュウの待つ我が家へと帰っていった。

「きゅーきゅー」

家へ近づいていくと、キュウは待ちきれないとばかりに鳴き出していた。彼はルーシャの足音と他の人間の足音を正確に聞き分けているらしい。

「お待たせ、今帰ったわ」

ルーシャはににこと笑って、家の扉を開けた。
そこに待ち受けていたのは、金色のうろこを持つ大きな爬虫類のような生物——ドラゴンだった。

「ただいま」

きゅうきゅうと鳴きながら甘えるように頭をすりつけてくる小さなドラゴンを、ルーシャが「よしよし」と撫で回す。キュウの皮膚は硬く、少しごつごつしている。

大人のドラゴンはこの家に入りきらないほど大きい、キュウはまだ子供だから、なんとか狭い家の中でも生活ができているのだ。彼の背はルーシャのお腹あたりまでしかない。

「お腹減ったでしょ？ ご飯にしよう」

ルーシャは自分用のパンときこのスープを用意した後で食卓についた。しかしまずはキュウにご飯を与えるのが先だ。餌を待つ鳥の雛のように大きく口を開けて待っている子ドラゴンに向かって、ルーシャはかごに収穫してきた果物を1つずつ投げていった。

「おいしい？」

皮も種も気にせず、ガリガリと噛み砕いていくキュウ。口に詰まっていた分を飲み込むと、また大きく口を開ける。生えそりかけている大きな牙は、カリムの果汁ででかてかと濡れていた。

キュウの豪快な食べ方を見ているのは、なんだか楽しい。ルーシャは自分のスープが冷めることも気にせず、可愛いドラゴンに食事を与え続けた。

彼女がキュウと出会ったのは、ひと月前のことだった。

ルーシャが食料——その時は自分の食べる分だけを——調達しに森へ入ると、奥の方から「きゅうきゅう」という助けを呼ぶような鳴き声が聞こえてきたのだ。それがキュウだった。

初めて目にしたドラゴンの姿にルーシャは最初こそ驚いて怯えたものの、キュウがまだ子供だったことと、足に軽い怪我をしていたこともあって、保護する事に決めたのだ。

『ドラゴン＝獰猛』というイメージを持っていたルーシャは、すぐのように自分の後を追ってきたキュウに、良い意味でイメージを崩され、今ではすっかり情を移してしまっていた。

この世界には、人間の住む国とドラゴンの住む国がある。ドラゴンは人間ほど数が多いから、住んでいる国の面積もそれほど大きくはない。大陸の一角、険しい岩山に囲まれた土地で、彼らは生活しているのだ。

そしてその土地は、ルーシャが住む村の、森を挟んですぐ隣にあった。キュウがどうしても岩山を越えてきたのかは分からないが、一人で空を飛んで遊んでいるうちに、誤って人間側に落ちてきてしまったのかもしれない、とルーシャは思った。その日はすごく風の強い日だったのだ。

「卵は？」

小屋で飼っている鶏が今朝生んだ卵をルーシャが手に持って見せると、キュウは嬉しそうに口を開けた。彼は卵も好きなのだ。

ルーシャはテーパールの角に卵を当ててひびを入れると、キュウの口の上でカパツと割った。中身はとろりと殻から落ちて、キュウの

口内に吸い込まれていく。

（１ヶ月か……）

次の卵を割りながら、ルーシャは少し暗い顔をした。

キュウと過ごしたこの１ヶ月は、ルーシャにとつてとても楽しく濃い日々だった。両親がはやり病で亡くなってからというもの、ひとり寂しく過ごしてきたのだから尚更。

もう何年も一緒にいるみたいに、ルーシャにとってキュウはかけがえのない存在になっていた。

しかし彼はドラゴンだ。本来、人間とは距離を置いて生きていかなければならない生き物。

ドラゴンたちは基本的に人間の土地へはやって来ない。彼らは知能が高く、崇高な生き物だ。ドラゴンはドラゴンだけで社会を作り、生きている。

そして人間もまた、ドラゴンの住む土地に行くことはない。侵入者を許さないドラゴンたちの餌になってしまうことを恐れて。

２つの種族は、同じ世界できつちりと住み分けをしていた。ルーシャとキュウのように、同じ家の中で生活するなんて考えられない事だ。

だが、そんな事はルーシャもよく分かっている。だから他の村人に見られないように、キュウを家の中から出さないようにしていた。彼を外に出せるのは、村人たちが寝入った真夜中だけだ。遊びたい盛りだというのに、窮屈な生活をさせて可哀想だとも思う。

（そろそろ離れなきゃいけないわよね……）

ルーシャは、キュウをドラゴンたちの住む国に帰さなければ思っていた。最初のうちは、もしかしたら母親のドラゴンが迎えにくるのではと期待していたのだが、1ヶ月経っても一向にその様子はない。

おまけにキュウはルーシャに懐いてしまつて、怪我はもうすっかり治っているというのに自分で飛んで帰ろうとしないのだ。

だけどこのままこの家で、キュウが生活できるわけがない。彼はこれからどんどん成長するだろうし、村人に見つかったら大変な騒ぎになる。討伐のために騎士団がやってくるかもしれないし、あるいは捕われて、見せ物にされてしまふかもしれない。

離れるのはルーシャも辛かったが、別れて生きていく方がキュウのためだと思っていた。

「ねえ、キュウ。私、あなたを本当のおうちへ帰さなくちゃ」

食事を終えた後で、ルーシャはキュウにそう伝えた。キュウは目を見開き固まったが、すぐに「ぎゃうぎゃう」と反対の声を上げる。

「キュウ、わかつて……私だってあなたとは離れたくない。けどしょうがないのよ」

ルーシャは静かに、ドラゴンが人間の国で生活する危険性を説明した。討伐隊がくるかも、と話した時は、キュウは『そんな奴ら倒してやる』とばかりに息巻いていたが、

「私はキュウが傷つけられる場面なんて見たくないの。キュウが人を傷つける場面もね」

ルーシャが悲しそうにそう言うと、しゅんと翼を垂れた。

時間はかかったが、丁寧に話して聞かせると、キュウはドラゴンの住む国に帰ることを渋々受け入れたようだった。自分がここにいと、ルーシャにも迷惑がかかると思っただけらしい。

その日の夜は、狭いベッドに2人並んで眠った。窮屈でも関係ない。お互いのぬくもりを忘れないように、しっかりと肌に刻み付けたかったのだ。

翌日、別れの日。

昼間のうちは家の中で2人一緒に過ごし、真夜中になってから村人たちの目を盗むようにして、ルーシャとキュウは家を出た。

森を抜けるのに半日ほどかかり、岩山に着く頃には空は白みはじめていた。ここを越えれば、その先はドラゴンの領地。

「キュウ、私がついて行けるのはここまでよ」

ルーシャは悲しそうに眉を下げて、キュウを振り返った。できれば一緒にキュウの親がいるところまで行ってあげたかったが、人間であるルーシャがドラゴンの国に入ることはできない。それ以前に、目の前の険しい岩山を越えられそうになかったし。

「お別れね……」

ルーシャの瞳には涙が浮かんでいた。別れて生きるのがキュウのためなのだと自分に言い聞かせなければ、とてもじゃないけど離れる事はできそうにない。キュウがいなくなったらこれからの生活がどれだけ寂しいものになるだろうか、とルーシャは思った。

しかし、ここで自分が寂しいと泣くわけにはいかない。

ルーシャは服のそでで涙を拭くと、弱々しく笑ってキュウに言った。

「ここでさよならしないと……元気でね、キュウ」

終始うつむき、消沈した様子で——しかしドラゴンの国に帰らなければならぬ事には納得した様子でここまでやってきたキュウだったが、ルーシャからの別れの言葉を聞くと、「やっぱり離れるのは嫌だ」とばかりにぎゃあぎゃああと騒ぎ始めた。

「そうだ、これ持っていて」

しかしルーシャはそんなキュウの訴えを聞かないようにして、わざと明るい口調で話し続けた。家から背負ってきていた麻のリュックを降ろし、中身を見せる。

「中にはパンと干し肉と、カリムの実が入っているの。キュウのお家がどれくらい遠いか分からないから、途中でお腹がすいたらいけないと思って」

自分と目を合わせようとしないルーシャを、キュウは睨んだ。そしてルーシャはそんなキュウの視線に気づきながらも、何でもないふりを続ける。

「キュウ？」

しかし、突如きびすを返して森の中へと入っていたキュウを見て、ルーシャは戸惑いの声を上げた。可愛いしっぽを左右に振りながら、キュウはどんどんと進んでいく。

「待って！ どこへ行くの、キュウ！」

ルーシャは降ろしていたリュックをもう一度背負い直し、キュウの後を慌てて追った。

「キュウ?」

ルーシャが追いつくと、キュウは大きな木の根元でうずくまっていた。

「キュウ、大丈夫?」

しかし彼女が声をかけると、パツと振り向いて駆けよって来る。そしてなにやら真剣な表情で、ルーシャに向かって口を突き出してきたのだ。

「何? どうし……」

キュウの太い牙の隙間に挟まっているものを見て、ルーシャは胸を震わせた。

「これ……私に?」

感激したようにつぶやく。キュウは花をとっていたのだ。そしてそれを、ルーシャにプレゼントしようとしてくれている。

これから別れて暮らす私へ饞別をくれるつもりなのかしら。彼女はそう思っ、嬉しそうにほほ笑んだ。

手を伸ばして、キュウの口にくわえられている1輪の花を受け取る。

「ありがとう、すごく嬉しいわ」

我慢していた涙が、思わずこぼれ落ちた。泣きながらとびきりの

笑顔を見せるルーシャに、キュウも笑った。彼女が花を受け取ってくれたことが嬉しいのか、はしゃぎながらルーシャの周りをぐるぐると飛び回り、そして――

「きゃあああああ!？」

悲鳴が森を揺らした。

何を思ったのか、キュウはルーシャが背負っていたリュックをいきなり足で掴み、彼女ごと持ち上げて空高く飛び立ったのだ。

「なに、ちょ、待って……っ！ キ、キュウ！ お願い、降ろして！」

腕が抜けないようにしっかりとリュックを掴んで、顔を青くさせながらルーシャが叫んだ。

しかしキュウはフンフンと楽しそうに鼻を鳴らすばかりで、彼女を降ろすつもりはないらしい。高度はぐんぐんと上がっていき、2人は森の木よりも、果ては岩山よりも高い位置を飛んでいた。

「ひいひい……！」

ときおり強い風が吹いてキュウが「おっと」と揺れるたび、ルーシャは恐怖で気を失いそうになった。

「キュウ、駄目よ、そっちは……！」

自分たちの向かう先を見つめ、ルーシャは慌てて言う。キュウは岩山を越えるつもりだ。人間であるルーシャを連れたまま、ドラゴンの領地に入ろうとしている。

ルーシャが住んでいた村には、たまによそ者の人間が通りかかることがあった。

数人で組んで、旅ができるだけの装備と武器を備え持っていた彼らの目的は、ドラゴンの国に入ることだった。

その理由は金のため。ドラゴンの血は不老不死の秘薬になるという噂だったり、かの国では土を掘ればザクザクと宝石が出てくるといふ噂だったりを真に受けて、ドラゴンたちの国に侵入しようとしていたのだ。

村がドラゴンの国と隣接していたこともあって、ルーシャは何度もそういう浅ましい人間たちを見送ってきた。

だが、ドラゴンの領地から帰ってきた人間を見たことは1度もない。ただの1度も。

侵入したが最後、彼らはみんな殺されてしまったのだ。

「キュウ、お願い、私は入っちゃいけないの！」

ルーシャは必死に訴えたが、キュウは相変わらずご機嫌な様子で空を飛び、ついに岩山を越えてしまった。

キュウはルーシャを掴んだままゆるゆると降下して、硬い岩地に着陸した。

ここはもう、ドラゴンたちのなわばり。ルーシャはあわあわと怯えた。

「どどどどうしよう……私……ドラゴンの国に入っちゃったわ」

顔面蒼白、動揺しまくりなルーシャとは対照的に、彼女をここまで連れてきた張本人であるキュウは、余裕な表情でしっぽをブンブンとふり続けていた。

大丈夫だと言うように、ルーシャの頬をぺろんと舐める。

「わわわ私、帰らないと……」

キュウからもらった花を潰れないようにリュックに入れて、ルーシャはよろよろと立ち上がった。

——と、その時。

「……っ！……!?!?」

突如彼女たちの前に、小山のように巨大な生物が降り立った。

その着地の衝撃で大地はビリビリと揺れ、風が巻き起こる。

乱れる髪を抑えながらルーシャが恐る恐る見上げると、そこにはキュウよりずっと大きく、迫力のある茶色いドラゴンが立っていた。牙を覗かせながら、人間であるルーシャを鋭い瞳で睨みつけてい

る。

「す、すいません、私……」

ルーシャのか細い声は、しかし茶色のドラゴンが発した吠え声に一瞬でかき消されてしまった。ルーシャが震える足で後退していても、ドラゴンは喉を震わせ、低い声で唸り続けながら距離を詰めてくる。

そして大きく口を開けると、大きく尖った牙でルーシャを噛み殺すべく襲いかかってきたのだ。

「きゃあああっ!!」

巨大なドラゴンに、ただの人間が勝てるはずもない。ルーシャは自分の死を覚悟しながらも、反射的に体を丸めて縮こまった。

——と同時に荒々しいうなり声が響く。

茶色のドラゴンのもものより高いが、大人顔負けの凄みのある威嚇の声。

「……………キュウ？」

ルーシャは顔を上げ、目を見開いた。

彼女をかばうようにして、金色の小さなドラゴンが立ちはだかっている。目をつり上げ、牙をむき出しにし、自分よりずっと大きなドラゴンに向かってうなり声を上げているのだ。

今までキュウの可愛い側面しか見たことのなかったルーシャは、その気迫に息をのんだ。しかし恐ろしいとは思わない。彼は身を挺

して、自分を守ってくれているのだから。

その頼もしい姿に感動を覚えたルーシャだったが、しかしすぐに我に返ってキュウのしっぱを引っ張った。

「キュウ、危ないわ！ 逃げて！」

同じドラゴンでも、小さなキュウに勝ち目はなさそうだった。

このままでは2人とも殺されてしまう。そう思ったルーシャが絶望した瞬間、キュウの姿を視界に入れた茶色のドラゴンが、こぼれ落ちんばかりに目を丸くして固まった。

「ギャ……ギャウ？」

そして何かをキュウに問いかける。

キュウは茶色のドラゴンを睨んだまま、それに対して「ぎゃうぎゃう」と答えた。ルーシャは何がなんだかさっぱり分からず、首をかしげる。

「ギャウギャウギャー、ギャウギャウ！」

茶色のドラゴンは驚いた様子で何やら言い残すと、慌ててこの場から飛び去っていった。

「……キュウ、どういうこと？」

小さくなっていく上空のドラゴンを見つめながら、ルーシャはぼつりと言った。しかしキュウはいたずらっぽく笑っただけで、その質問には答えてくれない。答えてくれたとしても、ルーシャにドラゴンの言葉は分からなかっただろうが。

「ねえ、キュウ。このままここにいるのは危険よ……」

ルーシャは落ち着かない様子でそわそわと辺りを見回した。

あの茶色のドラゴンが去ってから20分ほど経っただろうか。ルーシャとキュウの2人は、先ほどの岩場から1歩も動いていなかった。

何故か茶色のドラゴンは去っていつてしまったが、またいつ他のドラゴンに見つかるか分からない。ルーシャは一刻も早く人間の領地へ帰りたかったのだが、キュウがそれを止めるのだ。

彼はルーシャを地べたに座らせ、その膝の上に頭を乗せてごろごろしている。

「キュウー……どうしてそんなにくつろいでられるの？」

ここは敵地だ。別にルーシャはドラゴンを敵とは思っていないが、向こうは侵入者のルーシャを敵とみなすだろう。いつ襲われるかも分からない場所で気を抜くなんて、彼女にはできなかった。

「きゅうきゅう」

温かな舌がルーシャの手のひらを舐めた。キュウはさつきから、ずっと機嫌がいい。

これからどうしようか、とルーシャは頭を悩ませながら、甘えてくるキュウの相手をしていた。

しかしその数秒後、突然キュウが顔を上げ、遠くの空を見上げた。つられてルーシャも空を見る。

するとそこには先ほどのあの茶色のドラゴンが、別の2頭のドラゴンたちを連れてこちらへ向かってきていたのだ。

「た、大変！」

ルーシャの体から血の気が引いた。仲間を引き連れて戻ってきたのだろうか？

だが、キュウは相変わらず焦る様子がない。ルーシャの膝から頭を起こすと、飛んでくるドラゴン一行を待ち構えるように立ち上がった。

もしかしてキュウは彼らを待っていたのだろうか？ さっき茶色のドラゴンと話していたのは、こういう事？

ルーシャは混乱しながら、キュウと飛んでくるドラゴンたちを交互に見つめた。

とにかく、キュウを置いて自分だけ逃げるわけにはいかない。

ルーシヤは戦々恐々としつつも小さなドラゴンの隣に立って、茶色のドラゴンたちの到着を待った。

先頭を飛んでいた茶色のドラゴンは、しかしルーシヤたちの上空近くまでくると速度を落として後退した。そして別の2頭——あざやかな赤と青のドラゴンに先頭をゆずる。彼はただの道案内役だったらしい。

ルーシヤたちの目の前に降り立ったドラゴンたちは、やはり皆大人のドラゴンで大きく、威圧感があつた。

青と赤の2頭のドラゴンはマントをしていて、手には紋章の入った腕輪をつけ、戦士か騎士かというような雰囲気をもっていた。

一方で茶色のドラゴンは人間の国でいう平民のような身分らしく、赤と青のドラゴンの後ろで控えめに首を伸ばし、こちらの様子を伺っている。

「きゅうー！」

いかめしい顔をした赤と青のドラゴンに向かってキュウは気軽に声をかけ、「ようー！」とでも言うように、その小さな手を軽く上げた。

「キュ、キュウってばー！」

慌てたのはルーシヤだ。キュウの手を掴み、あわあわと下に降ろ

させる。

青と赤のドラゴンは、キュウを見て目を見開いていた。自分たちに対する無礼な態度に怒ったのかしら、とルーシャが心配したのも束の間……

2頭のドラゴンは一瞬のうちに姿を縮め、背の高い人間の男へと変化したのだ。

「ええっ!？」

ドラゴンが人になると知らなかったルーシャは、魔法のようなその変化に驚愕した。

赤と青の髪を持った青年に姿を変えたドラゴンたちは、足早にこちらへ近づいてくる。よく見るとその姿は人とも少し違った。耳はとがっていて、普通の成人男性よりも身長が高く、筋肉質だ。マントや腕輪も小さくなり、しっかりと服も着ている。

しかし何より驚いたのは、その2人のキュウに対する態度だ。彼らはキュウの前までくると地面に片膝をつき、頭を下げた。

「ご無事で、エストランダ様」

エストランダ様？

ルーシャは困惑した。

もしかしてそれが、キュウの本当の名前なのだろうか。『キュウ』というのはルーシャが彼を保護した時につけた名前だから、もちろん本名が別にあっただっておかしいことではない。

だが、エストランダ『様』というのは……

キュウは赤と青の2人に事情を説明するように、ぎゃうぎゃうぎゃうと鳴いた。

「そうですか、人間側の土地へ落ちてしまわれていたんですね。本当によくぞご無事でいらっしやいました」

「女王陛下もずっと心配しておられたのですよ」

青と赤が順番に話す。

ルーシャは嫌な予感がしていた。エストランダ様という敬称呼び、キュウのことを心配しているという『女王陛下』、そして小さなキュウにひざまずく、大人のドラゴンたち。

もしかして私が一緒に暮らしていた金色の可愛いドラゴンは、やんごとない身分のドラゴンであつたのでは？ ルーシャはそう確信した。

「あの……」

おずおずとルーシャが話しかけると、赤と青のドラゴン——今は人の姿をしているが——はサツと顔を上げ、冷たい瞳でルーシャを射抜いた。

「人間が何故ここにいる」

赤の人が威圧するように立ち上がる。

しかしルーシャが怯えるよりも早く、キュウが「ぎゃーぎゃー！」と抗議するように鳴き始めた。その言葉を読み取って、赤の人はルーシャに向かって頭を下げる。

「失礼致しました。貴女がエストランダ様を保護して下さいだったので。臣下として、お礼を申し上げます」

「い、いえ……」

ルーシャは密かに深呼吸して、一度気持ちを落ち着かせてから質問をした。

「あの、キュウはこの国でどういう身分なのでしょうか？　もしかして王族とか、そんな――」

「キュウ？　勝手な名前で呼ぶのはやめて頂きたい。この方はエストランダ様です」

今度は青の人が立ち上がった。

だがまた今回も、ルーシャが「すいません」と謝るよりも早く、キュウが「ぎゃーす！」と怒りの声をあげた。

青の人を睨みつけた後で、きゅうきゅうと鳴いて甘えるようにルーシャのスカート裾を引っ張る。

「えつと……これからも『キュウ』って呼んでいいってこと？」

ルーシャがなんとかその行動の意味を読み取ると、キュウはしばを振りながらうなづいた。

赤と青の人、そしてひっそりと後ろにいた茶色のドラゴンは、キュウのルーシャに対する懐きっぷりに少し驚いたようだ。軽く瞠目して、困惑している。

青の人はハッと我に返った後で、ルーシャに言った。

「失礼致しました。エストランダ様が望まれる通りに呼んで差し上げてください」

「あ、はい。そうします」

「先ほどの貴女の質問の答えですが、確かにエストランド様はこのドラゴンの国の王族です。現女王陛下のご子息で、第一王子という身分にあらせられます」

「お……王子……」

ルーシャは息をのんだ。そして後悔する。ドラゴンの国の王子様に、今までとても馴れ馴れしく接してしまった。粗末な食事しか用意できなかったし、ボロっちいベッドの上で寝かせてしまった、と。

キュウはそんなルーシャの考えを読んだのだろうか。すねたような声で「きゆう！」と鳴き、口を尖らせた。

子供らしい素直なキュウの仕草を見て、ルーシャは安心したようにほほ笑む。

「ごめんねキュウ。そうよね、あなたはあなただもの。いつだって、可愛い私のドラゴンよ」

そう言っつてキュウの鼻先にキスを落とす。

キュウは一瞬驚いた後、照れたように笑いながら、風を巻き起す勢いで嬉しそうにしっぱを振った。

しばらくフフフと笑い合っていた2人だが、赤の人のわざとらしい咳払いによって注意を引き戻された。

「ここで立ち話をするのもなんです。女王陛下もお待ちですし、城へ帰りましょう」

赤の人がキュウに提案すると、続いて青の人がルーシャに言った。

「貴女も城へいらして下さい。エストランダ様を保護して下さい。恩人ですから、お礼くらいはさせて頂きたい」

「私もお城へ行っていていいんですか？　ありがとうございます」

お城だとかお礼だとかいうことはルーシャにとってどうでもいいことだったが、数時間でも長くキュウといられるのならば、その申し出を受けた。

1度は決意したものの、やはりキュウと離れるのは辛い。お城へ行き、キュウがちゃんと本当の母親の元へ戻れたのを確認した後で、私は人間の国へ帰ろう、とルーシャは思った。

「ではこちらへ。貴女は私が運びましょう」

そう言つて赤の人がルーシャに近づき、その腕を取った。

——と、思つた瞬間、素早く腕から手を離す。

「きゃっ!？」

赤の人と自分との間に走った光の筋に、ルーシャは小さな悲鳴をあげた。

発生源を辿って振り返ると、そこにいたのはキュウだった。大きく開けられたキュウの口内から、太い光線が真っ直ぐに伸びていたのだ。

咄嗟にルーシャの腕から手を引いた赤の人だが、その指にはキュウの光線がかすっていたようで、少しやけどを負っている。

「キュウ！」

口からビームなんて出せたのね、と一瞬感心してしまったルーシャだが、すぐに我に返ってキュウを止めた。

キュウは口を閉じたものの、ぐるぐると唸りながら赤の人を睨みつけている。

「まさか……」

赤の人が顔をしかめた。何かを確認するように、キュウとルーシャの顔を交互に見つめる。

やがて困惑したように頭をかくと、

「まあ、話は城へ戻ってからにしましょう」

そう言っただらごんの姿に戻り、青いドラゴンと共に飛び立っていった。

訳が分からず首をかしげるルーシャのリュックをキュウが掴み、先に行った2頭を追うように舞い上がる。茶色のドラゴンはこの場に留まるらしく、地上でのんびりと手を振っていた。

「きゃああああ！」

空の上で、ルーシャは本日何度目になるつかという悲鳴を上げていた。

どうしてさつきキュウは怒ったんだろう。あの赤のドラゴンに運ばれた方がキュウも楽だろうし、私も多少の安定が得られたのに、と思いながら。

小さなキュウにいつ千切れるかも分からないリュックを掴まれて空高く飛ぶ、ということは、なかなかの恐怖だ。大きなドラゴンの背に乗って移動する方が、まだ安心できる。

岩地を越えて、森や湖を通り過ぎ、石で出来た家の集落もいくつか越えた。

そうして見えてきたのは、飾り気のない、しかし力強い存在感のある巨大な城だった。近づくにつれ迫力を増す灰色の石の城に、ルーシャは圧倒される。

「すごい、ここがキュウのお家なのね」

風に揺られながら言つと、頭上にいるキュウが「うん」と言うように短く鳴いた。

「本当に大きいわ」

ルーシャが呟く。

城が目前に迫ると、前を飛んでいた青のドラゴンが低く鳴いて、キュウになにやら指示を出した。指差す方向には城の正面入口がある。

きつと「あそこに降りますよ」と言っているのだろうとルーシャは思った。

が、キュウは青のドラゴンの指示には従わず、ルーシャを連れただま城の広いバルコニーへと着陸した。

赤と青のドラゴンも慌ててその後を追い、身軽な人の姿に変化すると同時にバルコニーへ降り立つ。

「エストランダ様！　いくらなんでも窓から女王陛下のお部屋に伺うのは――」

キュウを注意しようとした青の人の言葉は、

「なにやら騒がしいな」

バルコニーと接する部屋の中から現れた人物によってさえぎられた。

背が高いその女性は、筋肉質な細い体を持ちながらも胸が大きく、スタイルが良かった。はつきりとした顔立ちの、人目を引く美人だ。不機嫌そうにしかめ面をしていた彼女だったが、キュウの姿を目にすると一瞬で歓喜の表情に変わった。

「エストランダ！　エストランダではないか！　心配したぞ！」

腕を広げた彼女の元に、キュウも嬉しそうに駆けよる。

きつとあの女性が女王陛下で、キュウの母親なのだとルーシャは思った。

「ガルデオ、こちらへ来い！　エストランダが帰ってきたぞ！」

ドラゴンの女王は、戻ってきた息子を抱きしめながら部屋の中に向かって叫ぶ。女王に呼ばれてバルコニーへと出てきたガルデオな

る人物は、熊のように大きな筋骨隆々の男性だった。

「おお！ よく無事で戻ったな、エストランダ！ このやんちゃ坊主め」

どうやら彼がキュウの父親らしい。女王とその王婿おうせいであるガルデオは、小さなキュウを押しつぶす勢いで抱きしめた。

キュウも苦しそうにしながらも、1ヶ月ぶりの両親との再会を喜んでいようだ。

「よかった……」

お互いを抱きしめ合うドラゴンの親子を見て、ルーシャはほほ笑んだ。キュウが本当の家族の元へ戻れてよかった、と。

しかしそこにはほんの少しだけ、寂しいという感情も存在していた。キュウが自分の家へ無事に帰った今、私の役目はもう終わったのだ。ルーシャはそう考えて、悲しそうに目を細めた。

「きゅう！」

だが、キュウは久々の再会にしてはあっさりと両親から離れ、またルーシャの隣へ駆け戻ってきた。

「エストランダ？ その人間は誰なのだ？」

女王がすつと立ち上がって言った。その横ではガルデオも立ち上がり、危険がないか探るような瞳でルーシャを観察していた。

「彼女はエストランダ様を保護して下さった方です」

後ろに控えていた青の人が説明し、それに付け加えるようにしてキュウが「ぎゃうぎゃう」と鳴いた。

「そうか、よくしてもらったのだな」

キュウの話を受けて女王がうなづく。そしてルーシャに向かって話しかけた。

「うちの息子が世話になったようだ。私からも礼を言う」

「い、いえ……」

ルーシャは恐縮して肩をすくめた。自分は人として当然の事をしただけだし、むしろキュウと楽しい時を過ごせた事、こちらが感謝したいくらいだったのだ。

「あの、陛下……1つ気になる事があるのですが」

赤の人が言う。

「何だ？ 申してみよ」

許しを得ると、赤の人は静かに女王へと近づき、ひそひそと小声で話し出した。ルーシャは隣にいるキュウを撫でながら、何を思う

でもなくその様子を眺める。

やがて話が終わり赤の人が離れると、女王はその鋭い視線を自分の息子へと向けた。

「エストランダ。お前、その娘を伴侶にする気か？」

「伴侶……！？」

驚いたのは、ルーシャとガルデオだった。目を丸くして、答えを求めるようにキュウを見つめる。

「きゅー！」

女王の質問に同意するような、ご機嫌な声。

その返答を聞いて、ガルデオがガハハと笑った。

「そうか、まさか俺の息子が人間に惚れるとは思わなかったな」

「え？　ちょ、ちょっと待って下さい。私とキュウはそんな関係じゃ……」

ルーシャは混乱しながらも、慌てて言い訳をした。キュウはまだ子供だ。幼い彼をたぶらかしたと思われたらどうしよう、と不安になって。

そんなルーシャの様子を見た女王が眉根を寄せる。

「だが、そなたはエストランダからの求愛を受けたのでは？　エストランダはそう言っておるぞ」

「ぎゃー！」

女王の言葉に同意するようになり、キュウが鳴く。

「求愛？ いえ、そんなことは……」

ルーシャが言う。

いくら記憶を辿ってみても、それらしいことをされた覚えはなかった。そもそもキュウが自分をそういう意味で好いてくれていたことにすら気づいていなかったのだし。ずっと母親代わりとして懷かれていたと思うていたのだ。

「ぎゃうぎゃうー！」

ルーシャの反応が気に食わなかったのだろうか。キュウは不満げに鳴くと、ぱたぱたと飛んでルーシャの背後に回った。

そして彼女が背負っているリュックに頭を突っ込むと、中から1輪の花を取り出した。ドラゴンの国へ入る前にキュウが渡したものだ。ルーシャはそれをお別れのプレゼントだと思っていたが……

「きゅうー！」

キュウは何やら必死な様子で、その花をルーシャに見せてくる。「これ、受け取ったよね？ 受け取ってくれたじゃん」とでも言っているよう。

ルーシャは信じられない思いで呟いた。

「まさか求愛って……」

「オスがメスに花を贈ること」

女王が引き継ぐ。

「それがドラゴンの求愛なのだ。伴侶にしたい相手を見つけたらオスは花を贈り、メスはその花を受け取ることで求愛を受ける。……だが、どうやらそなたはそれを知らなかったようだ。まあ、人間ならば無理もない。エストランダが一人で先走りすぎたようだ」

「きゅう……」

自分の気持ちに通じていないと分かって、キュウは小さな手で花を掴んだまま、がっくりと肩を落とす。そのあまりの落ち込みように、ルーシャは思わず彼の鼻すじを撫でた。

するとキュウはパツと顔を上げて、きゅうきゅうと悲痛な声で鳴きながら、もう1度花をルーシャに差し出してきたのだ。

それが求愛だと知った今、ルーシャは簡単に花を受け取ることはできなかった。しかし泣きそうなキュウの顔を見ているとこちらまで悲しくなってきた……

「エストランダ。同情を誘って花を受け取ってもらうなんて、女々しいやり方するんじゃない」

ルーシャがどうしようかと迷っていると、父であるガルデオが叱責をとばした。キュウはじつとりとガルデオを睨みつけ、「もうちょっとだったのに」というように口を尖らせた。

なんだかキュウの心の声が——しかもたまに黒い——読めるようになったてきたわ、と思ったルーシャは、ふと気になったことを女王に質問した。

「あの、キュウは……あ、キュウって私が勝手にこの子につけた名

前なのですが……キユウは人の姿にはなれないのでしょうか？」

「あの…… キュウは人の姿にはなれないのでしょうか？」

言葉が通じていれば求愛うんぬんの思い違いもなかっただろう。そして何より、ルーシャはキュウと直接会話をしてみたかった。人のキュウの声を聞いてみたいと思ったのだ。

だがそれは、今のところ不可能な願いだった。女王が説明する。

「キュウはまだ子供だから無理だな。人のかたちをとれるのは大人のドラゴンだけなのだ。あと数年待て」

「そうですか。では、もう一つ質問なのですが、女王陛下たちは……その、キュウが私を伴侶とすることに反対はしないのでしょうか？」

ルーシャが遠慮がちに言うと、女王はぴくりと片眉を上げた。

「なんだ、そなたもエストランダのことを愛しておるのか。伴侶となるつもりなのだな？」

「い、いえ、それはまだ……。キュウのことは大好きですが、まだこの子は子供ですし……」

慌てて言うと、一瞬瞳を輝かせたキュウも、またしゅんとうなだれた。

「ただ……もし、もしですよ。もし、将来的に私とキュウが結婚することになったとして、ドラゴンの王子のお嫁さんが人間というのはどうかしらと思ったので」

ルーシャの質問に、女王はあっけらかんと答える。

「ああ、それは問題ない。エストランダは第1王子だが、上に姉が2人いるからな。王位を継ぐのは1番上の姫になるだろう。だからエストランダは誰でも好きな者を伴侶にすればよいし、それが人間の娘であつても構わない。まあ、血を重んじる臣下の中には人との結婚を反対する者もいるだろうが、それも私が黙らせるから問題ない」

「そうですか……」

胸を張る女王に、ルーシャも返す言葉がなかった。女王は続ける。

「しかしそんな事を気にするとは、まだ異性としては見れぬまでも、そなたもエストランダとのかを真剣に考えておるのだな？」

「え……ええ。キュウが私のことを好きだと思ってくれているのなら、私もその気持ちに応えたいのです。だけどやっぱり、今のところキュウは可愛いドラゴンで、今すぐどうこうというわけには……」

この1ヶ月ずっと、ルーシャはキュウのことを子供として扱ってきたのだ。その認識をすぐに変えることはできないし、小さなキュウに恋心を抱くことに罪悪感もある。倫理的にどうなのか、と。

迷うルーシャに、女王は深くうなづいた。

「焦らずともよい。まだ子供のエストランダにオスとしての魅力が

ないのは当然。だが、さきほども言ったようにエストランダはあと数年で大人になる。ドラゴンは人間のように成年になるまで18年もかからないからな。今は小さな我が息子も、これから1年ごとに目に見えて成長していくだろう。そなたが求愛に対する答えを出すのは、エストランダが大人になってからでも遅くはない。数年かけて、じっくり考えよ」

答えを出すまでの猶予期間を与えられ、ルーシャは少しほっとした。

性格や内面の部分で言えば、現時点で十分キュウのことは好いている。一緒にいて癒されるし、楽しいのだ。

しかしキュウが成長し、人型をとれるようになったら、さらに彼を男として好きになることもできるかもしれない。その可能性は大いにあった。

「では、城に部屋を用意させよう。そなたはここに住んで、エストランダとの仲を深めるがいい」

女王の言葉にルーシャは面食らった。

「え、このお城に……ドラゴンの国に住むのですか？」

「何だ？ 何ぞ不満でもあるか？」

「い、いえ、不満なんて……」

突然の展開で驚きはしたものの、キュウと離れず暮らしていけるのは嬉しいことだ。故郷にちょっぴり未練はあるが、別れを惜しむ家族もいないし、もう2度と戻れないというわけでもない。むしろ自分の息子との結婚をしつこく勧めてくるアイノスと、もう顔を合

わせなくていいのだと思うと、少しすがすがしい気分になつた。

「あの、でも1度家へ戻ってもいいでしょうか？ 荷物も持ってきてたいですし、飼っている鶏も連れてきたいのですが……」

特に貴重品など無いが、両親の形見の品をいくつか自分の元に置いておきたかった。大事な鶏たちも放っておいたら小屋の中で餓死してしまう。

ルーシャのささやかな申し出を、女王は快諾する。

「構わん、行つてこい。荷物持ちにエゲイラを連れてゆけ。背に乗れば、岩山もなんなく越えられる。しかし人間に見られて騒ぎにならぬよう、日が落ちてから行くのだ」

エゲイラというのは、赤の人のことらしかった。女王が持っていた扇で彼を差すと、1歩進み出て頭を下げてくる。

「きゅうきゅう！」

と、そこでキュウが自分の存在を主張するように鳴いた。女王がふつと笑う。

「エストランダもついていくと言っておるぞ。まだ幼いのに、一人前に嫉妬などしおつて」

ルーシャはしゃがんで、キュウと視線を合わせた。

「キュウも来てくれるの？」

「きゅうー！」

金のドラゴンはしっぽを振ると、背伸びをして、手に持っていた花をルーシャの髪にさした。彼も自分が大人になるまで、求愛は先延ばしにするつもりなようだ。

「ありがとう」

なんだか心が温かく、満たされている。

ルーシャは花に触れ、ほほ笑んだ。きっと自分は将来、キュウのことを今よりずっと愛するようになる。

——そんな予感がしたから。

8（後書き）

このお話は短編として書いたので、ここで完結とさせていただきます。
最後までお読み頂きありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8994y/>

迷子の子竜と村娘

2011年12月3日21時26分発行